

生きる

宗教の普遍性

晴佐久 昌英

上

「あなたは必ず救われる」。キリスト教は、すべての人にもかって、そう宣言する。もしもあなたが悩みを抱えて苦しんでいるなら、「その苦しみは生みの苦しみだ。あらゆる苦しみには意味があり、必ず喜びにかわる。信じてほしい」と語りかける。

大切な人を「くじて悲しんでいるならば、「死はまことのいのちへの誕生だ。すべての人のいのちは永遠であり、必ず天での再会がある。信じてほしい」とよびかける。今、現に「らい十字架を背負っているすべての人々に、闇から光へむかう、復活の希望を告げ知らせるのが、キリスト教なのである。

「すべての人」というからには、いかなる条件もない。特定の宗教を信じていてもいなくても、善人も悪人も、およそこの世に生を受けた人間すべてである。特に、自分のような罪人は決して救われないと思い込んで自らを責めていた人に「そいいたい。「神はまことの親だ。すべての人をわが子として愛しており、必ず救う」と。

意外に思われるかもしれない。一般にキリスト教は、信者だけを救う宗教だと思われているし、現にそのように教えている教会もあるからだ。しかし、本来のイエスの教え

は、すべての人を分け隔てなく愛するあたたかい教であるし、キリスト教の最も深いところには、そのような究極の普遍性が流れている。私はカトリック教会の司祭であるが、「カトリック」とは「普遍的」という意味であり、現代のカトリック教会は何よりもこの普遍性を大切にしている。

第二条以下のすべてでは、この二つに基づいている。

ここでいう「救い」とは、「神と人が親子のように永遠の愛で結ばれ、人と人が兄弟のように愛し合う状態」のことである。これはいわゆる死後の天国のことだけでなく、そのような天国へとつながる、この世でも実現可能な天

すべての人は救われる

分け隔てなく愛す

国のことである。

もしも救いが一部の優れた人のものであるならば、私はどは間違いなく救われない側であろう。しかし、神は「こんな私を愛しているし、イエスは、まさに神とひとつに結ばれていたし、命を捨ててまで人々を愛して、そのようないふべき条件もない。私はこんな私を救ってくれた。だからこそ、あなたも必ず救われる」と信じて疑わない。

物事には優先順位というものがいる。仮にキリスト教法であるならば、第一条にはこうあるだろ。

「神は愛であり、すべての人の救いを望んでおられ、神にできない」とは何一つない。第二条にはこうあるだろ。

「イエス・キリストの言葉と行いは神の愛そのものだ。神は、イエス・キリストによって、すべての人を救わされた」

の二つに基づいている。

「神と人が親子のように永遠の愛で結ばれ、人と人が兄弟のように愛し合う状態」のことである。これはいわゆる死後の天国のことだけでなく、そのような天国へとつながる、この世でも実現可能な天

はれさく・まさひで 1957年、東京都生まれ。東京カトリック神学院、上智大神学部卒。87年、カトリック司祭に。現在、カトリック多摩教会主任司祭。著書に『星言葉』『十字を切る』(女子パウロ会)『あなたに話したい』(教友社)『恵みのとき』(サンマーク出版)など多数。



人は喜ぶし、その救いを知らずにいる人は苦しんでいる。だからこそ、教会は救いの宣言を使命としているのだ。

「信じる者は救われる」というが、何を「信じ」たからどう「救われる」のかが重要だ。これを特定の神仏を信じる者は御利益を得るとか、特定の宗教に入ったものが天国に行くのだと解釈する、普遍性が損なわれる。

むしろこれは、「すべての人が救いのうちにあること」を信じる者は、「その救いに目覚める喜びによって」この世でも救われるという上であります。

カトリック教会は、そのようにすべての人を救う方を神と呼び、普遍的な救いをもたらす方をキリストと呼ぶ。キリスト教はすべての人間にこう宣言しているのである。「あなたはもつすでに、救われている」と

そもそも、すべての人は神